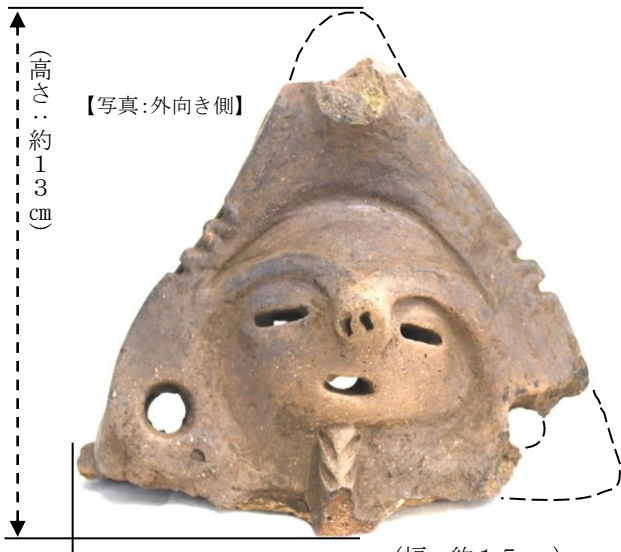


○出土遺物の情報	
名称	顔面把手（両面） 1点
造形	内外両面に半球状の顔、中空、表面磨き上げ
時代	縄文時代中期（約 5500～4500 年前）
注目点	座間市初の「顔」遺物、内外両面に顔面は珍品

【写真：外向き側】  （高さ：約 13 cm） （幅：約 15 cm） ・側面の厚さ：約 3 cm ・顔部分の直径：約 7 cm	【写真：内向き側】  ○想定本体について ・深鉢形縄文土器 ・口径：約 40 cm ・器高：約 60 cm ・解説：出土遺物「顔面把手」は土器の口縁部に把手状の装飾として付く。※土器の形はイメージの一つです。 ※形はイメージの一つです 想定本体
○出土遺物（外側写真）	○顔面把手付土器の想定図

市の緑ヶ丘地域、かみが沢公園の東側台地上における周知の埋蔵文化財包蔵地内で、令和 4 年 10 月 7 日に埋蔵文化財保護の手続きを経た公共工事が着手された際に、写真のような出土遺物「顔面把手（両面）」が発見されました。

この遺物は、縄文時代中期（約 5500 年前～4500 年前）の所産で、座間市内では「顔」を表現した出土品として初めて確認されました。この遺物は顔面把手付土器と一般に呼称される本体の一部破片（把手部分）として出土したもので、復元が困難なものの、同様の遺物は南関東・甲信地方を中心に出土事例があり、そのため元は深鉢形の縄文土器であったものと想定できます。

日常生活での使用には不向きなため、儀式などの特別な場で煮沸道具として使用されていた可能性があり、市内の縄文ムラの内容や性質を探る重要な手掛かりになります。

顔面把手付土器は、近隣では相模原市や厚木市などで既に博物館へ収蔵・展示されています。しかし、両面に顔面がある同様の遺物は、県内および全国的な出土事例からも珍しく、考古資料としての価値がありながら、造形面でも縄文人の美への造詣の深さを感じる良好な出土品です。